

第18回 ちゅうでん教育振興助成（平成30年度）

報告書資料 一般 - 54

学校名・団体名	稲沢市立大里中学校
コース	学校支援
活動・研究のテーマ	互いに高め合い、夢に向かってよりよく生きようとする生徒の育成

〈活動・研究の意義および活動報告〉

I 主題設定の理由

本校はこれまでに、研究主題「自他の命を大切に、他者を受容し自己肯定感を高める生徒の育成」（平成28年度）、「自他の輝きを認め合い、共に輝いて生きる生徒の育成」（平成29年度）のもとで道徳教育の充実を目指し実践に取り組んできた。これらの成果として、自他の命を大切に自らの命を輝かせようとするだけでなく、他者の輝きを認め相互理解の関係を築いていこうとする姿が見られるようになってきた。その一方、自他の輝きを認め、輝いて生きようとする意識は高まったものの、夢や目標に向けて努力しようとする意識が低いという課題が浮かび上がってきた。そこで、今年度の研究主題を「互いに高め合い、夢に向かってよりよく生きようとする生徒の育成～全校で取り組む道徳単元の実践を通して～」と設定し、10月の「生き方講演会」と道徳の授業を関連させた道徳単元「よりよく生きる」を要の実践として取り組んだ。

研究仮説 道徳教育において、自己の生き方を見つめ直す場を設定し、道徳単元「よりよく生きる」を構成し、実践することで、生徒は夢や目標に向けてよりよく生きようとするだろう。

単元目標 人とかかわりやつながり大切に、夢や目標をもって生きようとする気持ちを高める。

II 現職教育の取組

道徳教育の実践をよりよいものにするため、校内で全14回の現職教育会議を実施した。研究授業がよりよいものとなるように、事前検討会を実施し、授業構想を基に生徒の反応を予想しながら、発問を検討した。研究授業の後には、研究協議会を実施し、授業記録をもとに、授業の成果について共有した。2月中旬には評価研究会を実施し、生徒の学びの記録をもとに、道徳における評価について話した。



また、年間を通して、愛知教育大学非常勤講師の水野達彦先生、名古屋大学大学院教授の柴田好章先生より、道徳の授業方法に関する指導を受けた。水野先生には、導入の道徳の授業では自作資料である教材を提供していただき、深化の「生き方講演会」では、講師として全校一斉の道徳授業を行っていただいた。柴田先生には、研究授業における事前検討会や研究協議会で指導を受けた。

時期	内容
6月下旬	・事前検討会① ・3年生研究授業 ・研究協議会①
10月上旬	・事前検討会② ・1年生研究授業 ・研究協議会②
10月下旬	『生き方講演会』
11月上旬	・事前検討会③ ・2年生研究授業 ・研究協議会③
2月中旬	・評価研究会

III 活動内容…道徳単元『よりよく生きる』

1【導入】道徳の授業「歌声はるか」【1・2／6】

授業の1時間目には、合唱コンクールの練習で、主人公が理想と現実に揺れ、葛藤する姿を通して、相互理解について考えさせた。泣いている主人公が学級委員に対して「じゃあ、どうすればいいの。だまっていればよかったの」と叫ぶ場面があったが、登場人物の思いをより身近に感じられるように役割演技を行った。主人公に対しての声かけとして、「あなたは正しいことを言っているし、間違っていないよ」「伝え方や練習の仕方など、他にもきっと方法があるはずだよ」と、相手の気持ちになって、伝える内容を考えていた。

授業の2時間目は、前時の物語を振り返りながら、資料には書かれていないA組のその後の物語を想像しながら話し合った。実際の場面をイメージしやすいように合唱曲「道化師のソネット」を試聴し、その曲想や詩の内容を味わいながら、歌詞の一部にある「いつか真実（ほんと）に笑いながら話せる日がくるから」に注目し、「『いつか』とあるけれど、A組にとって、その『いつか』って、いつがいいと思いますか」と発問したところ、「私たちが大人になってこの時のことを思い出すとき」という意見があった。



その後、「歌声ははるか」をもとに創作された「分かち合う」という詩を提示した。「この『分かち合う』の詩には、どのような思いが込められていると思いますか」と発問したところ「喜びや悲しみなど、どんなことでもみんな分かち合おうと言う思いが込められている」という意見があった。さまざまな経験を共有し、互いに分かり合おうとすることが大切であるという意識の高まりが見られた。

2【深化】生き方講演会『耳をすます』（講師：水野達彦先生）【3・4／6】

生き方講演会の講師として水野達彦先生を招き、「耳をすます」と題して、全校生徒を対象に一斉の道徳授業を実施した。前時の道徳で扱った「分かち合う」を全校で歌った後、水野先生の講演会が開始された。講演会では、サリドマイド症候群として生まれた真実（まみ）との実体験をもとにしてつくられた「不思議」という自作教材と、同じくサリドマイド症候群である実在の人物の半生を描いた映画『典子は今』を使って、全校一斉の道徳授業が進められた。



水野先生から生徒に向けて、「真実は周囲にあるものをすべて蹴散らし、大泣きしていました。きっと、学校でいたたまれぬ何かがあったのだろうが、私にはそれが見えず、ただただ見守り、待つしかありませんでした。真実にとって『いたたまれる何か』はどういうことだと思いますか」という問いかけがあった。生徒は「勉強や生活を不自由に感じていた」「腕がないのを理由にいじめられた」「周りの目や雰囲気が嫌になった」などと意見を発表していた。それに対して水野先生は次のように答えられた。「トイレに行く時は、自分の力で用を済ますことができず、誰かの手を借りなくてはならなかったことでした。思春期の真実にとって、それは何よりもつらいことだったようです」。

映画『典子は今』で最も印象的だったのは、足を巧みに動かして茶碗や箸を持って食べたり、筆や硯を使って毛筆による書を書いたりする姿、足を使ってミシンの針に糸を通す繊細な作業をこなす場面であった。生徒たちは映し出される映像に食い入るように見入っていた。資料の物語に話は戻り、真実が自分の境遇を克服し、自立して生活している様子や久しぶりに会えば、笑顔を見せ、握手を交わしていることが話された。水野先生は「昔は上手にからみ合わなかった指が、今は自然にからみ合い、その感触を愛おしく感じています」と語られ、その血のつながりを思って創作した「不思議」という歌が映像と共に朗読された。続いて、「たとえ、何もできなくても、一緒にそばにいる、見守る、そして、声なき声に耳をすます」と語られ、その思いをもとに創作した「耳をすます」という歌が映像と共に朗読された。

サリドマイド症候群を患いながらも、障害を乗り越えようと、力強く懸命に生きる姿から、よりよく生きることについて考え、人と人のかかわり方や自分自身について見つめ直し、これから生きていく中で大切なことは何かを考える機会となった。

3【発展】道徳の授業（各学年・明るい人生）【5／6】

発展段階として、各学年の発達段階に応じた「明るい人生」の資料を活用して道徳の授業を行った。1年生は「私は何のために生きているの」、2年生は「在校生へのメッセージ」、3年生は「輝いて生きる」を教材とした。2年生の授業では、看護師として働く主人公の気持ちから、「やりがいを感じられる仕事に就くことはすごく大切だな」と思った。一度やると決めたことは、どれだけ自分の理想と違っていても最後までやり切ることが大切だと思った。「人それぞれ、気持ちを伝えるのが上手だったり、不器用だったりするので、態度だけで人を判断するのはよくないと思った。将来、仕事について聞かれたとき、自信をもって充実していると言えるようにしたい」など、仕事を通して得られるやりがいや続けることの大変さに気付いた。そして、自分自身の将来の夢や目標に向けて努力していこうとする姿が見られた。

4【振り返り】道徳単元「よりよく生きる」を振り返って【6／6】

単元のまとめとして「歌声ははるか」「生き方講演会」「各学年の道徳」など、これまでの道徳を振り返り、心に残った活動を選択しながら意見交流する場を設けた。「生き方講演会」を選んだ生徒は、「自分自身の考えを見つめ直し、他人の考えも理解しようという思いが強まったから」という意見があった。「歌声ははるか」を選んだ生徒は、「自分と同じ年代の話であり、共感する部分がたくさんあった。私も恵子と同じで、一緒に歌ってほしいのに歌ってくれないと残念に思う気持ちが分かった」という意見があった。

V 研究の成果

実践前後の意識調査で、単元の目標としていた「①よりよく生きる②相互理解③集団生活の向上」の3つ項目の数値が上昇し、成果が確認できた。また、発言内容やワークシートには、道徳の授業や生き方講演会などを通して、自分の生き方について見つめ直し、考えている意見が多く記述されていた。単元目標にある「人とかかわりやつながり」について見つめ直し、「夢や目標」をもつ大切さについて考えさせることができた。